宮 津 純 先 生

石 原 智 男

故宮津 純先生

本学元教授，工学博士宮津純先生には，永らくご病気ご療養中のところ薬石効なく，昭和 37 年 10 月 29 日逝去されましたことはまことに哀悼に堪えません．

先生は明治 37 年6月 15 日熊本県にお生まれになり，第五高等学校を経て，東京帝国大学工学部機械工学科に入学，昭和2年にご卒業になりました．ご卒業後は東北帝国大学に講師，助教授，教授として教鞭をとられ，昭和 17 年4月，本研究所の前身である東京帝国大学第二工学部の創設とともに本学教授に任ぜられ，機械工学第四講座を担当されて，整備途上にありました同学部の運営に寄与され，幾多の貢献をされたのであります．ついで生産技術研究所の設置に伴い，同研究所勤務となり，工学部ならびに大学院学生の教育にもたずさわれ，研究と教育に専念されましたが，昭和 34 年 12 月ご病気のため退官ひたすら療養に努められたのであります．

先生は流体力学，流体機械学の研究分野においてご活躍なされ，学会に御発表の論文は 80 篇以上におよび，巨大な足跡を残されました．昭和の初期，流体の流れをもっぱら実験的に究明しようとする水力学的な研究が盛んなとき，先生はいちはやく流体力学の適用を試みられ，種々な難問題の理論的な解明をおこなわれました．とくに，流れの中における渦の運動と安定に関する論文や，粘性流体の拡大収縮流れに関する論文は，古典的な水力学の分野に新しい息吹きをあたえるものとして高く評価され，その一部は Philosophical Magazine 誌に掲載されております．その後，流体力学の適用をさらに広められ，当時未知とされていた一部の流体機械の性能を理論的に追究され，摩擦ポンプや歯車ポンプの性能の理論解析法を確立されました．このように，先生のご研究の方法は，いずれも流体力学の基礎理論を巧みに応用され，実際現象に対する明快な理論的解明をあたえられることであり，その手法は多くの研究者に引き継がれて広く活用されております．また先生は機械学会理事をはじめ幾多の委員会などにおいて指導的な役割を果たされ，斯界に大きな貢献をなされました．

先生の学問に対するご熱意はまことに大きく，真理の探求にはいささかの妥協も許されぬ厳しさをもっておられました．しかしその反面，先生独特の温和さで学生の教育にあたられ，学生に学問をすることの喜びと創造することの楽しみを自然の形で植えつけられました．第二工学部の卒業生に，他と比較して流体力学や流体機械学を専攻する研究者の多いことは，先生のご薫陶のたまものといえましょう．

先生は滅私至純，まことに人格高潔であられ，その高邁なご風格は知人，門下の等しく敬仰するところでして，その面における数々の挿話を残されました．そのいずれもが聞く者に涼風を感じさせることは，先生のご人徳によるものといえましょう．

公的にこのような偉大な業績を残しておられる一方，ご家庭におかれてはきわめてよき父上であられたようにお見受けしました．3人の御子様が全員揃って英才として立派に成長しておられることは，先生のご自慢の種であったことと思います．

いまやすでに幽明境を異にはいたしましたが，先生の愛された当研究所の発達と，わが国の流体力学・流体機械学の発展を眺めていて下さることと信じます．門下生の一人として，謹んで先生のご冥福を祈りつつ．

(1963 年2月 23 日受理)